

中学生における居場所の獲得・喪失が 自尊心・親和傾向に与える影響

○中本初花（指導教員 藤田依久子）
（安田女子大学心理学部）

研究の目的

青年期は自分を深く見つめ、かつ周囲の人間や状況にも関心を強めるため、アイデンティティ確立にとって心理的「居場所」が重要な意味をもつ（小畑・伊藤，2001）。また、石本（2010）は、青年期において居場所感が強いほど心理的適応も高いと報告している。

本研究の目的は、中学生における居場所の獲得・喪失の実態やその背景を、小学生から中学生への時系列の変遷について、調査法を用いて検討することである。

方法

調査対象：H県私立中高一貫校の中学1年生33名(有効回答数27名)が回答した。

手続き：授業時間内に質問紙を配布し、回収した。
質問紙：小学校時、ならびに現在における自分の居場所の有無に関する質問に加え、安定感・疎外感・被受容感・没入感・有用感の5因子からなる居場所感尺度(岸・諸井，2011)に関する47項目、自尊感情尺度(山本・松井・山成，1982)に関する10項目、そして、親和動機尺度(杉浦，2000)における親和傾向因子に関する9項目から構成した。

結果

居場所感尺度における5因子の尺度得点と自尊感情尺度得点、親和性動機尺度得点の間の相関係数を小・中学校それぞれで算出した(表1参照)。

安定感と自尊心に関して、小学生時には相関がみられなかったが、中学生時では正の相関がみられるようになった。安定感と親和動機では中学生時に正の相関が強くなった。疎外感と自尊心では、小学生時には正の相関がみられたが、中学生時では相関がみられなくなった。疎外感と親和動機では、小学生時には相関がみられなかったが、中学生時では負の相関がみられた。さらに、没入感と親和動機では、小学生時には相関がみられなかったが、中学生時では正の相関がみられるようになった。

考察

小学校から中学校へと進級することで、安定感と疎外感が自尊心ならびに親和動機に与える影響の変化が相対的に大きかった。このことから、居場所の獲得・喪失において、安定感と疎外感が特に関係する可能性が示唆された。

参考文献

1. 石本雄真. (2010)青年期の居場所感が心理的適応、学校適応に与える影響. 発達心理学研究 21(3): 278-286
2. 小畑豊美, 伊藤義美. (2001)青年期の心の居場所の研究-自由記述に表れた心の居場所の分類. 名古屋大学情報文化学部・名古屋大学大学院人間情報研究科情報文化研究 14: 59-73

表1. 居場所感5因子と自尊心・親和動機における相関係数。

小学校から中学校へかけて+0.2以上の変化は紫、-0.2以下の変化が青ハイライトで記してある。

	小学校		中学校	
	自尊心	親和動機	自尊心	親和動機
安定感	0.035	0.415 **	0.310	0.752 ***
疎外感	0.320	0.023	0.054	-0.447
被受容感	0.130	0.709 ***	0.261	0.742 ***
没入感	0.553 **	0.114	0.445 **	0.386 *
有用感	0.201	0.641 ***	0.240	0.638 ***

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$